

とちぎ夢大地応援団カレッジ活動報告(令和元年9月14日実施)

茂木町 深沢地区「イチゴ苗の定植作業」

9月14日(土)、栃木県茂木町深沢地区にある「美土里農園」で、令和元年(2019)年度第1回「とちぎ夢大地応援団カレッジ活動」を実施しました。宇都宮市の帝京大学経済学部の学生と教職員合わせて15人が参加。同農園の観光農園用ハウスで、イチゴ苗の定植作業を体験しました。

カレッジ活動は、未来を担う若い世代に、農作業や農村資源の保全活動を体験してもらい、農業資源の保全活動を体験してもらい、農業・農村の果たす役割について理解を深めることが目的です。県内の大学や短大、高校生などが参加して、毎年、各種の活動に取り組んでいます。

この日、作業に携わったのは、帝京大学経済学部地域経済学科の学生たち。農山村をはじめ地域が抱える課題解決に向けて勉強しています。今回は農作業を実際に体験できる貴重な機会として参加しました。

イチゴ苗の定植は、学生たち全員が初めての経験。同農園の職員らの指導を受けながら、観光農園用のハウス4棟に苗を植え付けました。中腰になっての根気のいる仕事ですが、若いだけあって弱音を吐くこともなく、手際よくこなしていました。

さくら市出身の3年生の和久井智之さんは「農作業自体がほとんど初めてで、想像以上に大変。高齢化など農業が抱える課題も勉強しているが、その苦勞が実感できた」と感想を語りました。



▲参加した皆さんで記念撮影を行いました。天気もますますで作業もはかどりました。



はじめに、栃木県農村振興課主幹和氣氏より、御挨拶をいただきました。
地方の農村では、若者に対する期待値が大変高く、呼び込みに必死になっている。今回作業を体験することで、農山村の現状を知って欲しいと語りました。



作業開始です。イチゴ苗の定植について、美土里農園スタッフの樋山氏より説明がありました。「ストローを手前にもってきて植えること」「苗は30度程度傾斜して植え込むこと」等を紹介しました。
また、「実が生ったら、是非、食べに来て欲しい」とも。



イチゴ苗の定植がはじまりました。
このように終始中腰の作業は大変疲れたと思います。
一つ一つ丁寧に植え込んでいきます。
また、途中、学校生活についてや就職について等、楽しい会話が弾みます。他にも恋愛相談等、会話が途切れません。



昼食時間中に農家さんと意見交換会を開催しました。
主に農業経営についてでしたが、実務を経た経験者だけあり、話に説得力があります。普段の経営学と合わせて、大変勉強になったと思います。講演した矢野氏は、イチゴの付加価値が必要と力説しました。